

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオラントス」
ラテン語でボランティアの意

No.68(2022.7.1刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

ご挨拶

茨城県立図書館長
小田部 修一

皆様はじめまして。4月より茨城県立図書館長に着任しました小田部修一と申します。皆様、どうぞよろしく願いいたします。

ボランティアの皆様には、日頃から、図書館でのボランティア活動において、大変お世話になっております。

さて、図書館長に着任して約2ヵ月が過ぎました。この2ヵ月間、今の県立図書館がどのような状況にあるのか、お客様や職員とのコミュニケーションを図りながら、毎日のように館内を巡り、図書館の把握に努めて参りました。その中で感じたことは、当館が、幼児からお年を召した方まで大変多くの皆様に愛され、頼りにされ、利用されているとともに、まだまだ大きなポテンシャルを持っているということです。

インターネット環境の発達やスマートフォン、電子書籍の登場により、読書環境は大きく変化しておりますが、一方で図書館を利用している方々からは、実物の本で読みたい、本や資料に囲まれていたいという思いをひしひしと感じます。毎週末に、ご家族でご来館され、家族全員分のカードいっぱいに本や資料を借りてくださるお客様や、また毎日、図書館にお越しになり、新聞や雑誌等を楽しむお客様もいらっしゃいます。そのお客様の思いに応えるためにも、図書館の利用環境の改善と館内外サービス活動の充実・強化を図り、県民の皆様の生活向上や文化の発展に寄与し、さらに多くの皆様に利用していただける図書館にしていかなければならないと強く感じたところです。今までの良き伝統や積み重ねてきた歴史は、引き続き大事にしていきながら、新しいことに積極的にチャレンジし、魅力あふれる図書館を作って参ります。

現在、県立図書館は、生涯学習施設としての役割とともに新たな交流の場として、コミュニティを数多く形成する役割もあります。利用者のコミュニティももちろんですが、本館の100名を超えるボランティアの皆様も一つのコミュニティです。しかし、令和2年度、3年度と利用者の皆様をはじめ、ボランティアの皆様にも活動において多くの制限を強いることになりました。カフェ整備による休館や新型コロナウイルス感染拡大防止のための休館、取組によるものです。制限を受けた中でも、出来ることを模索し、図書館サービスを維持できたことは大きな糧となりました。そして、令和4年度は3年ぶりにフルスペックでの運営となりました。ボランティア活動

においても、この2年間を取り戻すべく、活発に活動していただきたいと思います。コミュニティが重なることは、人とのつながりが広がることを意味します。図書館側の人、利用者側の人、それぞれにとって人生を豊かにし、生きがいにつながる場を提供することができればと考えております。今後は、既存の図書館運営にとらわれず、この2年間で蓄えた知見も生かしつつ、新規事業も企画して、更なるコミュニティの場を提供できるようにしていきたいと考えています。

本年度の図書館活動としては、昨年7月にカフェがオープンしたことで、従来の静かな図書館のイメージから人が集まり交流する図書館を目指すこととなりました。カフェの併設は、県民の皆様からは大変好意的な意見を頂戴しております。見た目にも美しいシンメトリーの構造は、建設計画当初から練られた構想であり、鏡を一面に配置し、空間を広く見せる工夫をし、来館するお客様の一割以上が利用されるなど、新たな利用者の開拓につながりました。図書館におきましても、本年度の重点目標の一つに「県民の交流空間及び図書館の新しい楽しみ方の提供」を新たに加え、カフェと協業して様々な取り組みを行ってまいります。また、新着図書を置くカフェの周りの本棚は、当館の新たな試みの一つです。新着図書の貸出率は非常に高く、カフェ周囲の本棚について、質・量ともに充実させていきます。図書館の資料整備について、大きな「こどもとしょしつ」と児童資料の充実は、全国トップクラスであり、当館のキーコンテンツとなっています。昨年度は発行された児童図書全てを購入したほか、全

体の利用者数や貸出数が減少傾向にある中で、小学生までの利用者・貸出点数は増加傾向にあります。さらに、おはなし会は非常に人気のある催しであり、未来のリピーター獲得のためにも、今後とも充実していきたいと思います。さらに、「こどもとしょしつ」内に「子ども育児支援コーナー」をリニューアルし、子育て応援本を配架することで、保護者がより利用しやすい環境を整えました。図書館の本や資料は、利用されて初めて意味を持ちます。今年度はコロナ前の令和元年度より多くの皆様にご来館いただくこと、多くの本や資料をかりていただくことを目指して活動していきます。

最後に改めて、ボランティアの皆様には職員とともに図書館業務を担っていただき、感謝申し上げます。ボランティアの皆様の中には、図書館が今の場所に移転して以来、お世話になっている方もいらっしゃるということで、長年にわたる貢献に、頭が下がる思いです。また、最近は、新たにボランティアとして登録していただく方も増えており、皆様には、今後も職員とともに図書館を盛り上げていく存在として、期待をしております。最後に、ボランティアの皆様の御健勝と御多幸を祈念して挨拶とさせていただきます。

茨城県立図書館借出書籍の書評

—登山特集—

宗教研究者(曹洞宗雲水)

桜井 淳

河口慧海『河口慧海日記—ヒマラヤ・チベットの旅—』(講談社学術文庫、2007)

この本の表紙に使われている絵は、著者が旅の途中で描いたもので(荷物運びは、女性のように見えるものの、実際には、男性)、建物は、ラサにあるポタラ宮殿である。

私は、世界を対象として、63歳から「巡礼登山」、64歳から「千寺巡礼」を開始しました。事前に、登山にかかわる小説や登山家の著書、宗教者の著書などを読み、全体の把握に努めました。

約150年前、すでに、河口慧海(当時32歳、禅僧)が、日本人として初めて、当時、鎖国中のネパールからチベットに入り、途中、寺院での修行、標高約5000mのヒマラヤの峠越え、ずっと西のパキスタン寄りのチベットにある聖地であり未踏峰カイラス、チベットを東に向かい、チベット最大の都市ラサで2年間の修行など、結局、神戸港→船→インド→(ネパール)カトマンデュ→ポカラ→ヒマラヤ峠越え→(チベット)カイラス→ラサ→インド→船→神戸港と、計6年かけての巡礼旅がありました。ヒマラヤ峠越えからカイラスを経てラサまでの詳細な記録が『河口慧海日記(講談社学術文庫、2007)』に記されています。

当時は、ヒマラヤ越えルートの情報がなく、食事や服装も粗末で、ヒマラヤ越えや全体的な生活は、大変だったと思います。途中、荷物運びを雇ったり、ヤクに乗ったり、羊の背に荷物を乗せたり、すべての行程を一人というわけではなく、村人や巡礼者や寺の人達のお世話になっての旅ですが、当時、ネパールとチベットは、鎖国中でしたから、完全な密入国の危険な旅でした。

非常に正確に、控えめに、一切の虚構を排除した、信頼性の高い記載内容で、日本のタレント登山家に、ぜひ、読んでほしい内容です。

河口は、巡礼中、イギリスのスパイと疑われ、河口を支援した人達が捕り、罰を受けましたが、河口は、そのことに心を痛め、行く先々で、迷惑がかからないように気配りし、日記や著作にも、具体的な行き先やかかわった人達の話は、記さず、意図的に、曖昧にしたところもありました。河口は、ネパールやチベットの最高指導者に、自身が日本の禅僧であり、仏教の経典を求めての巡礼旅であることを明かし、支援した人達に、被害が及ばないように強く要請する「上申書」を提出していました。

河口はネパールの政治・経済・文化にかかわる政策への提言もしていました。私が訪れたチベットにある仏教寺院には、河口の貢献を讃える展示物と業績説明がありました。

河口は、毎日のように、読経と座禅をしていました。河口は、僧であり、学術調査者であり、登山家であり、冒険家でした。帰国後、河口の著作が発表されると、鎖国中の国での想像を絶する記載内容に、「つ

くりごと」「うそつき」と罵られ、それどころか、訴えられました。

私の禅僧としての巡礼旅は、河口の実施したことの困難さに比べ、100分の1のレベルにも達していないように思えます。なお、厳しく、精進せねばならないと決心しました。

今西錦司『今西錦司全集 13 卷』(講談社、1974)

今西錦司の研究分野は、登山・探検・文化人類学・生物学・霊長類など、広範囲に及び、本当の研究者・教養人です。世の中にもっとも知られた業績は、溪流の魚の生態学の研究から、流速の速さや激しさに着目し、その環境で生きられる種類の魚が集まり(頭や体の形状)、環境を選択して生きる「棲み分け理論」です。山関係では日本アルプスの森林地帯の「垂直分布論(標高対応)」も知られています。両者は、経験的に、多くの人達が気づいていたことですが、それをそのままにせず、体系化し、論理化したことがオリジナリティなのでしょう。

全巻とも、こなれた分かりやすい表現をしており、誰にでも読めます。しかし、一世紀近く前の考え方であり、価値観との違和感をぬぐいきれませんでした。日本の代表的な文化人の論考であるため、必読書です。登山については、1930年代初めの世界認識で記されているため、ヒマラヤやエベレストについては、心の中の世界に留まっており、いまの世界認識との差に驚きました。私の登山経験を基にすれば、まった

く役に立たず、「今西の時代にはそのようなことでしたか」という程度の感想です。

ヒマラヤ登山キャラバン(1950年代前半には地方空港がなかったため、キャラバン隊は、カトマンドゥからひたすら歩いた)の感想は、登山という視点よりも、むしろ、途中で遭遇した人達やそこで見た動植物など、文化論的視点での考察が興味深く、過去に、日本の代表的な登山家が記した登山の技術やすごさの誇張の記録ではなく、深い教養と文化的かおりのする作品です。結局、アンナプルナもマナスルも K2 も、単なる情報集めの偵察・探検の次元に留まり、登頂とは関係ない世界の話です。

マナスル偵察についての記載において、「ポーターの数名は裸足で雪の上をずっと歩いていた」とありますが、私は、夏山のそのような事例は、認識しているものの、雪山でそれをやるとは、いくら、環境になれているとは言え、むごすぎるように感じました。いまでも、シェルパやポーターの中には、日本人の普段着のような服装で、エベレスト登頂した例がありますが、受け入れがたいほどの苛酷さです。

私は、本書を読み、文化論の次元では、自身の視点の狭さに気づきました。

最近の登山家は、登山の状況報告しかできませんが、今西のような文化論的考察をすべきです。両者は研究者(学者の今西錦司)と山に登るだけの登山家(体育会系の三浦雄一郎・植村直己・野口健など)の視点の違いです。

学術用語に英語(約 95%)とドイツ語(約 5%)が混在しており、英語に統一した方が良いように感じました。

歴史をたどり、生物の世界の分類学の当時の現状との中で自身が提案した研究成果(「棲み分け理論」「(北アルプス植物の標高)垂直分布理論)」について、分かりやすく解説しています。実に、読みやすく、やさしさを感じる表現です。教養を身につけると言うことはこのような書籍を熟読することなのでしょう。ごく見慣れた自然を見る目が変わります。

ただ、山に登るだけのいまの無教養な登山家に、ぜひ読ませたい内容です。

「40年の回顧」の内容は、自然論の総まとめであり、登山論ではありません。内容は、一般性のある「棲み分け理論」や「(植物標高)垂直分布理論」を除き、すべて、半世紀以上も前の出来事であるため、時代性を感じます。

今西は、剣岳の周辺を観察して、日本にも氷河が存在するのではないかという問題提起をしました。それを引き継いだ研究者が、最近、その存在を証明しました。今西の着眼点には素晴らしいものがあります。

Number 編集部『あの山はもっと遊べる！』(文藝春秋、2013)

この本は、(株)文藝春秋のスポーツ月刊誌『Number』に掲載された山にかかわる記事を編集したもので、読んでいて楽しく、山の魅力に引き込まれます。そんな楽しみ方があったのかと改めて試したくなるような内容です。

評価したい視点は、偏見や特定の価値観に左右されず、幅広い分野を同じようなウエイトで、遊び心いっぱい、深く探求し

ていることです。そのような視点は、編集者だからできることであり、すでに、登山にのめり込んでいる者(私もそのひとり)で、国内外の2000-5000m級の100峰登頂済み)には、定まった価値観や興味があり、それ以外のことには、なかなか、目が向かないものです。この本は、初心者を対象にただだけでなく、すでに、山に深くのめり込んでいるひとたちにも役立つ視点や情報(最近の登山用具や山小屋など)が満載されています。

最近、トレイルランニングやボルダリングやロードサイクルが盛んになっていますが、それらについても、多くの情報が掲載されています。

登山は、特定のひとたちの特別なものではなく、誰にでもできる実にバラエティ(登山、ロッククライミング、ボルダリング、溪流登り、ハイキング、トレイルランニング、ロードサイクルなど)に富んだ「遊び」です。この本で得た情報を基に、とにかく、楽しい第一歩を歩んでみませんか?きっと、新たな世界が感じられます。

田部井淳子「それでもわたしは山に登る」(文藝春秋、2013)

田部井さんは、女性登山家として、1975年の30歳の時に、世界で最初に、エベレスト登頂に成功しました。旦那さんも登山家です。

登山家の書いたこれまでの本は、すごさの誇示でしたが、この本は、むしろ、ごく普通のひとたちの目線から、人間の弱さと教訓を自身の失敗経験から示しており、登

山論(読みやすくまとめられていますが、登山について、かなり専門的なことに触れており、登山をやっていないひとには、本当の良さと困難さの意味を理解するのは、難しいかもしれませ)であり、人生論でもあります。

田部井さんは、謙虚で、がまん強く、他人への奉仕が好きで、建設的な考え方ができ、人生に積極的です。誰しもこれらの点を読み取れるでしょう。それらは、みな、登山経験から養われたものです。

登山は、自然の中で、よいこともあれば、きびしい気象条件の中で、危険にさらされることもあります。慎重で、辛抱強くなければ、登頂できません。意図しようがしまいが、自身にきびしく、他人に優しく、協力や奉仕の精神が自然に養われます。そうでなければ山に登れません。

後半の大部分は、2013年3月に発見されたがんについての赤裸々な病闘記録です。実に、建設的で、積極的な対応をしています。旦那さんも一身となって協力しており、ふたりの人間としての温かさと信頼関係がにじみ出ています。ふたりとも登山家だからできることです。相手のことが良く分かるのです。

共通の問題意識や趣味を持ったひとと人生を送ることにはいくつかの良い点があります。互いを心底よく理解できること、日常生活において共通の話題があるため会話が弾むこと、相手を大切にできることなどです。この本の後半部分にはそんな良い人生が記されています。がんは、克服され、よい方向に向かっているように読み取れました。

田部井さんは、海外のふたつの山(アンナプルナⅢ峰(7555 m)とダマヴェンド(5671 m))の登頂経験しかない時に、三番目の海外登山として、エベレストに登頂しています。実に大胆で、良い度胸をしています。最後にリストアップされている登山歴(pp.201-206)に拠れば、これまでに、海外の山に、登頂したか否かにかかわらず、177(私は国内外合わせて100)も登っています。72歳を過ぎたいまでも、毎年、海外の山だけでも、旦那さんと、年に数回も登っています。

登山は、ごく普通の費用で、普通のひとならば、70歳まで、特別に訓練された登山家でも、75歳くらいまででしょう。日本で高齢者が遭難(60-75歳)するのは、昔の実力と感覚が維持されていると錯覚し、気力と体力と実力の低下に気づいていないためです。普通の人には、安全を最優先し、70歳になったならば、潔く、止めるべきです。

私の乏しい海外登山経験(米国、スイス、フランス、ネパール)からすると、1回当たりの費用は、少なく見積もって約35万円(米国ヨセミテ国立公園内では約20万円)ですから、田部井さんは、登山に少なくとも、約7000万円、多めに推定すれば、その倍の約1.5億円も費やしています。趣味と実益を兼ねて、ここまで費やせると言うのは、実に、うらやましい人生です。それだけの経験と実績があっても、登山にかかわる著書は、わずかです(単著10冊)。世の中に向かって、オリジナルな視点から、ひとこと、何か言うことが、いかに大変か、良く分かります。

登山と言うのは、趣味の世界で、実益を考えたならば、成立しません。心を豊かにし、本当に充実して、満足できる人生を送るには、これ以上のものは、ないように思えます。

『Number Do-達人が教える山旅に行こう-』(文藝春秋、2014)

山野井泰史さんは、世界最強クライマー、服部文祥さんは、サバイバル登山の提唱者・実践者、田部井淳子さんは、世界女性初のエベレスト登頂者です。一流どころのおもしろい組み合わせです。

内容構成は、実に、ぜいたくで、バラエティに富んでいて、バランスの取れた、深い考察のある良い内容ばかりで、読むのが楽しみです。登山初心者のみならず、登山中級者にも参考になります。

「21世紀に登りたい低山 21座」(pp.58-59)には、私がこれまで13回登り、日常の登山訓練に利用しており、水戸線福原駅から歩いて30分の吾国山(518m)、それに、実家の群馬県太田市から30分の栃木県足利市にある一度登った大小山(282m)が含まれていましたので、意外性ととも、大変、親近感を覚えました。

「高尾山から2年でエベレスト!」(p.60)で、2年計画の具体的登頂予定名が記されていますが、後半の1年間で、エルブレス(5642m)、アコンガグア(6962m)、マナスル(8163m)は、きつく、おそらく、無理でしょう。私の経験からしても、2年ではなく、5年くらいかかります。

笹本稜平『その峰の彼方』(文藝春秋、2014)

いまから43年前に、妻と欧州旅行からの帰路、当時は、いまとちがって、モスクワ上空航路がなかったために、北極上空を通過し(乗客には全員、「北極点通過証明書」が渡されていましたが)、アラスカのアンカレッジ空港で給油してから、成田国際空港に向かいました。アンカレッジ空港上空から、目の前に、大きく、マッキンリー(地元ではデナリと呼ぶ)がそびえていました。大変印象に残る山です。

北米大陸最高峰の山(6194m、B.C.からの標高差はエベレストよりもあり、気象条件と寒さでも、エベレストよりもきびしいとされています)で、登山家の大きな目標のひとつになっています。しかし、単独冬期登攀となると、怖い山です。多くの登山家は、夏、ノーマルルートに挑戦します。怖い山ですが、それでも、いつか登ってみたいと思いつけてきました。私の登山計画はエベレストのつぎはマッキンリーになります。いま、わくわくしながら、読んでいます。

冒険家・登山家の植村直巳さんは、夏に単独登攀に成功し、冬の単独登攀にも成功しましたが、下山中に、クレバスに落下し、帰らぬ人となりました。マッキンリーとはそのように冷たい山です。

この本(492p.)は、冬季単独マッキンリー登攀(ノーマルルートではなく、難度の高いバリエーションルートで、冬季単独登攀は、きわめて危険とされています)での遭難から始まり、自然の美しさや冬山の厳し

さなど、その中で、関係者の心の動きを綿密に描写し、それとは対照的に、山の雄大さに負けないくらい鮮明に、人間の強さと信念と愛が描き上げられています。あまり気負わず、技巧を凝らすわけでもなく、透明性と素直さの文章が光り、大変読みやすく、理解しやすく、山岳小説の魅力を満載した優れた内容です。一気に読ませるストーリー展開です。

登山装備や行動描写も経験者でなければ表現できないような的確さが読み取れました(著者は、公開履歴に拠れば、継続的専門的登山経験がないようですので、過去の遭難記録を分析して、遭難状況と救出行動を把握したものと推定されます)。ただし、一箇所、気になったのは、いまの登山家がほとんど口にしていない「ピトン」という用語を使っていることです。「ピント」はフランス語で、日本では、登山技術や装備は、ドイツから入ったため、通常は、「ハーケン」を使っています。著者が登山家でないための甘さが出た一例です。評者は、このわずかな違いが分からなければ、書評などでできません。

主人公(津田悟)の遭難から不可能な生存救出までに、実に、詳細で、スリリングなストーリー展開になっています。救出されましたが、壊死した左足を切断し、凍傷のひどい手と足の指を切断しました。命だけは救われましたが、なお、昏睡状態(治療薬投与によって、一時的に意識を回復し(最後の最後の p.487 になって)、医師や関係者と会話するが、また、いつ醒めるとも分からない昏睡状態)が続きます。残された奥さん(祥子)は妊娠 5 ヶ月。主人公の山岳ガイド会社と彼が、長い間、温めてきた

ホテル建設と経営は、この先、どうなるのか、ハッピーエンドなのか否か、との問いに答えず、最後のページを迎えます。なお、表題は、「その峰の彼方に吉沢は思いを馳せた」(p.491、最後のページのひとつ前)から採っています。

登山とは何か、人間とは何か、信頼関係とは何か、人生とは何か、それらをきびしく問いかける心の叫びです。期待どおりの最高の作品で、99 点くらい差し上げられます。

上級登山家でも登攀困難な冬季マッキンリーのバリエーションルートからの単独登攀にともなう遭難と救出のようすを描いたスケールの大きな考えさせられる人生のテーマを織り込みの大作です。

ここで、展開を要約しておきます。

主人公の津田悟の登頂後の遭難、救助に向かう同僚と地元の救助隊員、遭難者は、救出過程で、二度も心配停止に陥り、それでも、蘇生に成功し、緊急ヘリで病院に搬送され、骨折で腐敗した左足膝下切断、凍傷の手足の指をすべて切断手術し、なお、昏睡状態が続きます。妊娠 5 ヶ月の津田の奥さんが心配します。治療薬の効果でいったん目を覚めますが、奥さんや救助者との会話後、また、昏睡状態に入り、つぎに、いつ、目を覚ますのが、その後、ふたりは、幸せな生活に戻れるのか、そんなことに含みを持たせつつ、物語は、終わります。本当に生きるか死ぬかの極限の世界の人間の信頼関係を描いたものです。

描かれていることは、1960 年代の高度経済成長期の競争と挑戦の時代の価値観であって、主人公の 38 歳という年齢といまの社会での問題提起としては、時代感覚が

少しずれているように感じました。

作者の登山についての認識と表現は、正確です。あまり的確なので、長い登山歴があるのか調べてみましたが、そうではないようです。自身で勉強したり、遭難事故報告書を熟読したり、上級登山者への聞き取り調査などをおして、登山知識を蓄積したものと推定されます。

昔は、一部の登山家の間で「ピトン」という用語が使われたことは、彼らの著書に記されており、そのとおりですが、私が認識する限り、作者と同じくらいの私と同じ年齢層の登山家は、みな、「ピトン」（フランス語）ではなく、「ハーケン」（ドイツ語）を使います。作品には数箇所、「ピトン」という表現が出てきます。なお、昔は、クライボン（フランス語）という用語も使われていましたが、普通、アイゼン（ドイツ語）が使われています。

ハーケンという登山器具は、ロッククライミングの際に利用するもので、手のひらに入るくらいの大きさの鉄片で、岩の割目にハンマーで打ち込み、ハーケンの穴にカラビナを装着し、カラビナにザイルをおして、自身の腰のハーネスに結びつけ、滑落防止のための支点にします。私は、常に、ナイフブレード型ハーケンを十数枚持っており、利用しています。

指摘事項のような微妙な違いまで把握していなければ、的確な書評は、書けません。マイナス1点は不的確用語「ピトン」の使用のためです。

私も、この本を読み、大変よい勉強になりました。

編集後記

館長の「ご挨拶」原稿の掲載が遅れてしまい、深謝。

今回の特集は、通信紙の原稿執筆者を増やす試みとして、茨城県立図書館の書籍の書評を掲載しましたが、最初の二冊は、確かにそうで、残り四冊は、そうではなく、私の所有する書籍です。

特集テーマの取り扱い書籍にこだわり、キーワードは、私の趣味としての「登山」です。茨城県立図書館には、常に、50冊くらいが、二階の書籍棚にあり、その他、地下一階に、200冊くらいあり、登山関係の書籍数は、決して少なくないように思えます。ボランティアの皆さんが、登山に興味を持ち、自然の美しさ、半面、気象条件の急変による厳しさを実感していただきたいと期待しています。

ボランティアの皆さんには、ぜひ、茨城県立図書館に所蔵されている22省庁が毎年発行している「白書」の書評の投稿を期待しています。さらに、この地球上の自然の美しさや生き物の不思議について、美しい写真と洗練され解説文で綴られた『ナショナルジオグラフィック(日本版)』(National Geographic)の書評にも期待しています。

さらに期待したいのは、文化人(作家や芸術家など)の成果を体系化した「著作集」の書評です。茨城県立図書館には、水戸芸術館の初代館長の吉田秀和さんの全22巻の全集があり、私は、それを数年前に読みましたが、ページの手触りから、誰も読んでいないことに気づきました。どなたかの書評を期待します。 桜井 淳